

擡げた批評を改めさせることにはなるのではないでしょうか。

背延びは、知識と経験の狭さを無理にカバーしようとするところから起ります。物事を知れば知るほどその深さ博さに気が付き、謙虚となり、心を閉ざすことは少くなりましょう。そうならば、背延びせずとも齊むようになり、着実な進歩が約束されるでしょう。

交友関係の形成もまた大学の重要な機能の一つです。勿論、私は学生諸君の交友の実態をよく知つてはおりません。しかし、時に見聞するところでは、上級生と下級生との向の交流は、私達の学生時代と比べると、やや不十分の感に感じられますし、また自分が専門に学んでいることについての話し合い—例えば自分のフィールドのこと、勉強の仕方など—と教室以外の場での程度行われているのを感じませんが、不活潑のように見受けられます。こうした交流が、直接問題解決のためにみり多いとは言えませんが、かゝることを通じて人の話をよく聞き、自分と異つた軍令の、また異つた環境に育つた他人と良い意味で協調して行ける下地が作られるのではないのでしょうか。私が学生時代、ある左翼の友人が、自分と意見を異にするクラスの学生のことを私に話し、アイツは馬鹿だと片付けた時、私はいわゆる左翼学生に対して強い不信の念を覚えました。どうかこんな事のないように——博い心で深い叡智を磨かれる事を祈ります。

ごたごた思いつくままに誌面を汚しました。これから文教育学部にも大学院ができ、地理教室も発展することでしょう。皆様の御建勝と御奮斗を期待しております。御西下の折には広島大学に御立寄下さい。歓迎します。

フィールド



岡崎 セツ子

真青な空。一面のみどり。たたまつけるような八月の^{ひかり}陽光。一見、平坦に見える台地。数回目にひきあげられたボーラーの先端は、別世界の冷たさを運んでくる。麦わら帽子の日陰だけがそれを迎える。——

軽車の音と遠くへつた。荒地に建てられる工場の建築の音だけが、いやによくとおる。草の生い茂つた野良には人影など見当らない。たまに運る人を、こちらが迎え、見送る。

ここは自分の所有地ではない。その点お互い様だ。ハンマーを振りあげているから———といつても———別に——土地会社？役場？——関係ない——。

「仲間の人は向うにいますよ」「はあー」(御親切様)我が仲間とは何をしている人かナ……。紅白のポールがちらちらみえる。測量。なるほど。

サイレンが、いきなり大きな声で昼を告げ、陽はいよいよ明かるく、輝きを増す。木陰に入り、やつと頭が店用きする。地表面の僅かな起伏——高まりはどの範囲までをとるか。比高は？。低い部分はどこへ続いているのか。地表面の隙は？。ロームの厚さは？——土地が高い部分で薄いのか？否。低いところか。否、そうでとない。——では？——事実を集めることか。

広い天空に、いつのまにか育つていた雲は静かに動きはじめ、次第に速度を速める一方、次は、おしなべて頭をかかされていく。雲量三、五……。自転車に乗った人が不思議そうな顔をして急いで坂を下りていく。急に松がった薄黒い雲が、太陽を独占していた地上にその偉力を発揮しはじめる。その機を逃さず、とう一本、ボーラーを打つ。速く——。だがここは仲々砂塵がでてこない。おまけにやけに固い。雲と競争。ノートに落ちる水滴が数を増し、書きにくい。小路に細流ができはじめると、なお厄介——。

桑の木影に入つてやたらに急ぐ雨を僅かに防ぎ、混沌とした天と地をなめていると、雨はおきらめたようやがて姿を消していった。午後2時滞りてちぢまつた袋からボーラーの頭がのぞいている。雀が驚きはじめ、蝶がひらひらと通りすぎていく。

事実を集めること——。高いか、低い、厚いか、薄いか——。それが一体何の意味をとつのか。どれだけの価値があるのか、何の役に立つのか。

葉の照りかえしに陽の高さを感ずる。立ちどまるべきか、進むべきか。今為すべきことは。

進む。夏は光の中を、冬は地面を削ぎとるように砂塵をまきあげ、吹きまくる風の中を。一歩一歩一人で。二人で。時には数人で。思考、行動。そのくりかえし。

大きな太陽が真赤に反つて西の山に沈み、無限の広さを薄明の空に感ずる頃、野良仕事を終えた人や家路へ急ぐ勤め人の仲間入りをする。

半年前にボーリングした地点が、とう新しい家の台所の下だ。あちこちの小道の曲り角には、小さなくいが見えな。東京の郊外。

かつて卒論の時歩いた細い道をとことこと歩く。式先生の面影が浮かぶ。明日も頑張ろう。

夏の空は深く、遠くなつた。